

# 山 大 社 会 学 同 窓 会 報 第 44 号

2022 (令和4) 年 6 月 15 日 発行

## 魅力的な人社系大学院とは？

社会学コース 教授 高橋征仁

同窓会の皆様方には、大変ご無沙汰しております。山口大学に赴任してもうじき30年になります。赴任当時の学生だった皆さんの中には、もうお子さんが大学生という方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

私は、その頃、専門にしていたL. コールバーグの道徳的発達論を離れ、その論敵であったJ. ハイトの進化心理学や道徳心理学をベースにした研究活動を行っています。昨年行った調査研究には、甲状腺がんの若者たちや子ども会の衰退現象、災害時の天譴論、新型コロナ対応の国際比較などがあります。どれもみな一筋縄ではいかない厄介な問題ですが、「社会統計学」という武器を使えば、世間の常識を超えて新たに見えてくることもたくさんあります。

現在、大学院人文科学研究科では、教育学研究科や国際総合科学部の先生方と、人社系の総合大学院「人間科学研究科」を新たに設立する方向で準備しています。この「人間科学研究科」は、人文科学コース・共創科学コース・臨床心理学コースの3コースからなり、地域で活躍する高度専門職業人の養成を目的としています。

地域社会の課題を解決していくには、どのような人材が必要なのか？大学院進学者にとっては、どのような教育体制やカリキュラムが魅力的なのか？大学院修了後の就職先や進学先には、どのようなものがあるのか？こうした点をしっかり調査研究して、「魅力のある」人社系大学院を作っていく必要があると考えています。そのため、大学院を修了したOB・OGをはじめ、いろんな方々にご意見を伺っている最中です。ご協力いただいた方々には、あらためて御礼申し上げます。この同窓会報をご覧の皆様方も、ご意見がございましたら、ぜひ [takahasi@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:takahasi@yamaguchi-u.ac.jp) までお寄せください。

とても不思議なことですが、私は、歳を重ね様々な幻想が打ち砕かれ、人生に挫折するたびに、なぜか知的好奇心がますます高まってきました。もし皆さんの中にも、知的好奇心を抑えられない方がおりましたら、ぜひ人文科学研究科、あるいは新設する人間科学研究科の門を叩いてみてください。きっと、次々に変わる新しい研究スタイルの革新に驚くとともに、それでもなお変わりなく続いている人間社会への探求心にも、驚かれることでしょう。

## フィールドワークが教えてくれるもの

1992 (平成4) 年卒、1996 (平成8) 年人文科学研究科修了

渡辺 啓太

学生時代は、フィールドワークとして企業や住民の方へのヒアリングを経験しました。当時は、企業活動を外から見るという立ち位置でしたが、今は企業に近い立場で、企業活動を支援する市場調査を仕事にしています。

市場調査では、消費者へのアンケート調査や、各種の需給統計などを利用する方法もありますが、企業を対象としたフィールドワーク（フィールド調査）もあります。入社した1997年頃と比べると、現在はインターネットで入手できる情報が多く、より入手しにくい情報や編集された情報が必要とされるようになっています。

調査の成否は、圧倒的に事前準備によるところが大きく、丁寧な準備をすることで、話題も広がり、相手の信用も得られます。私の場合、技術者の方との面談も多く、技術内容や専門用語の理解も重要です。

他人に話を聞くというのは、シンプルなようですが、質の高い情報を得るには非常に有効だと感じます。実際の面談では、話題の順番や相手の発話の意図を考えながら、面談を組み立てていく難しさはありますが、これまでの蓄積に基づく考え方を知ることが出来るのは、直接面談などのフリートークの強みです。大学の調査実習の際に、担当教官であった小谷先生から「熱意をもって聞かないと相手も応えてくれないよ」と指導を受けたことがあります。調査の目的は変わりましたが、今でも相手への接し方の基本として、大事にしています。

情報収集の後には、得られた内容の整理や意味を理解し、読み手に合わせて編集します。話者の立場や事

業の位置づけ、社会環境によって、意味が変わることもあるため、注意が必要です。

大学時代の調査実習では、企業の社会貢献活動を研究テーマにしていたのですが、昨今の企業活動は、社会とのかかわり方を重視した経営が強く意識されるようになってきていると感じます。

私の現在の業務は、地球温暖化対策に関連することが多いのですが、企業にとって直接的な事業収益になり難いのが実情ではあるものの、取り組みは加速しています。

自動車メーカーや、エネルギー会社など、超有力企業でさえ、カーボンニュートラルを実現できる確実な見通しも、収益確保する戦略があるわけでもありませんが、まずは目標を提示することが、優先されています。

地球温暖化は、社会の豊かさと表裏一体であり、現在と変わらない豊かさや安心を維持したまま、CO<sub>2</sub>排出量低減を実現するには、技術だけでなく、政策の方向性や環境規制・税金などの制度設計、また個人のライフスタイルに至るまで広範な取り組みが必要で、多くの人の協力なしには実現できないと思います。

大学を卒業してから30年が経ち、月日の早さを実感させられますが、カーボンニュートラルの実現目標とされる2050年も、あっという間に来てしまいます。少しでも社会に役に立つ情報を発信できたらと思います。

## 桜の舞う季節に思い出話を

1999（平成9）年卒 戸田（旧姓 山根）奏子

今頃樫野川の桜は、昔と変わらず満開に咲き誇っているのでしょうか？

社会情勢がここ数年で大きく変わってしまいました。大学でも授業の進め方や距離感が難しい状況で、試行錯誤しながら新たな体制・環境を作り上げていることと思います。横田先生からの依頼メールにも、卒業生と一度もコンパができなかったことが残念だと書いてありました。

20数年前、私達は毎日のように研究室に集まっては四方山話をし、小さなコンロでご飯を作り、お酒を酌み交わし、高橋先生に淹れて頂いたコーヒーを飲み…。時には、学部棟の玄関前で七輪を囲みさんまを焼き、樫野川で花見や芋煮会をし…。そこには先生方はもちろん、先輩方や後輩達の姿がたくさんありました。コロナ禍で人との交流が難しい世の中になってしまい、学生時代にとっても貴重であるはずの経験に制限がかかっていることと思います。今思い返すと本当に好き勝手に過ごしていたなと我ながら呆れますが、改めて私が過ごした学生時代はとても自由で恵まれていたんだと感じます。

私は卒論で「若者の音楽消費行動」をテーマに書きました。1990年代後半の音楽シーンは、CDの売上枚数が最多を記録し、ミリオンセラーが数多く生まれていました。また、カラオケで歌われることもヒットの大きな要因でした。TVでは曲そのものよりも、トークや歌手のキャラクターを演出する音楽番組が多くありました。大学生達がどういった価値観や趣向で音楽を聴き、どのように流行りが生まれるのかをアンケート調査して考察しました。時は流れ、現在音楽の聴き方は当時とは大きく変わりました。サブスクや動画配信を利用したスマホやパソコンで音楽を聴き、再生回数がヒット曲の目安になりました。多種多様な世界中の音楽が一瞬で繋がり、機器の人工知能が個人の聴取傾向からおすすめの音楽をどんどん教えてくれます。安価で簡単に好みの音楽を聴くことができたようになったのです。また、SNSがきっかけで人気が出る曲がある一方で、昔の曲が思わぬ使われ方をし若者に流行ったりすることもあるようです。今の若者の意識をアンケート調査したらどんな結果になり、どのような考察ができるだろうなあ、なんてことを考えたりもしました。

日々深刻なニュースが流れ、世界は不安な情勢です。毎日穏やかに過ごせているのが本当に有り難いことなんだと感じずにはられません。世界に平和な日常が一刻も早く訪れることを願います（2022年4月7日執筆）。

## 山口大学での学びを振り返って

2022（令和4）年卒 清水萌希

この度、私たちは晴れて卒業の日を迎えることができました。これまで指導していただいた先生方をはじめ、4年間学びを共にしてきた友人たち、温かく見守ってくれた両親、お世話になったすべての方々に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

私は社会心理学を専攻しましたが、大学入学前より語学を学ぶことにも強く関心を抱いていました。そのため、一年次には人文学部が募集する台湾研修に参加し、二年次には他学部の先生が主催するフィリピンへの短期語学留学に挑戦しました。台湾研修では、現地の学生の学びに対する積極的な姿勢に圧倒され、自分との違いに少し落ち込んでしまったというのが正直な感想でした。そこから、もっと自分を成長させ

たいという思いが湧き、翌年度にフィリピンへの留学を決めたのです。短期間ではありましたが、英語の習得だけではなく、様々な価値観を持つ人たちとの交流により多角的に物事を考えられるようになったことは、私にとって貴重な経験となりました。その後新型コロナウイルス感染症の流行により留学に行くことが難しくなったことはとても残念であり、このコロナ禍が早く終息することを願ってやみません。

そのように語学に関心を持ちながらも社会心理学を選んだのは、過去の先輩方の卒論テーマを拝見したことがきっかけでした。「こういうことが研究対象になるのか！」と感動したのを覚えています。一見、個人的で学問とは無関係に思われる事象も、その背景や人の意識などを踏まえてみると一つの社会的事象となりうることから、自分の興味がそのまま研究につながることに魅力を感じ、社会心理学を選びました。私が研究したいと思っていたのは「ペット社会」についてでしたが、具体的に何に焦点をあてるべきか悩んでいました。そこで偶然、三年次の調査実習で動物愛護団体の方々にインタビュー調査をすることとなり、動物愛護活動をする人々に着目した卒業論文を執筆することに決めました。ペットや動物愛護に関する社会学的な先行研究が少ない中、どのように調査を進めるべきか苦労しましたが、個人や組織といった立場による意識の違いなど、インタビューをする中で興味深い点が次々と浮かび、どの視点から考察すべきかを考えるのも今思い返すと楽しかったです。そうした調査を通して、一個人の語りの中に社会全体の実情が還元されているという、質的調査の本質を身をもって学ぶことができたと思っています。

4年間の大学生活のうちの約半分が新型コロナウイルスの影響下にありましたが、先生方や学務の方々のご尽力により平穩に学びを続けることができ、日常生活においても友人と過ごした何気ない日々が私にとってかけがえのない思い出となりました。これからの新たな生活に不安や緊張もありますが、この山口大学で得た経験を糧に成長し続けていきたいと思っています。

最後になりますが、これまでお世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 社会学同窓会・社会学研究室からのお知らせとお願い

新型コロナウイルス感染症への対応も3年目を迎えました。残念ながら、今年度も、社会学同窓会の総会・懇親会は中止のやむなきに至りました。

この3月には、社会学コースで学んだ46名の卒業生が巣立っていきました。卒業式当日の社会学同窓会主催卒業祝賀会も、昨年同様、短縮版という形ながら、何とか開催することができました。改めて、卒業生の皆様のご健勝を祈念いたします。

昨年10月の「山口大学ホームカミングデー2021」では、同窓生有志の皆様より、動画収録によるオンライン同窓会開催の企画提案が研究室に寄せられ、唯一の学部企画としてこれを実施することができました。準備期間が限られていたため、一部の方々のみの収録・公開となりましたが、小谷典子先生、辻正二先生、坪郷英彦先生といった名誉教授の先生方にも近況を報告していただきました。企画にご尽力いただいた皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

大学の授業形態はほぼコロナ前に戻っていますが、今年初めの第6波以降、部活や飲食などにおいて、いくつかの感染クラスターが発生したとも聞いています。キャンパス・ライフの正常化にはなお時間がかかりそうです。